

人と生き物がつくりだす関係の諸側面

ー フィリピン・カオハガン島の事例 ー

野中 健一・石川 菜央・宮村 春菜

要旨：本稿では、人と生き物の関係を流動的かつ可變的なものとしてとらえ、人と生き物が、どのように結ばれているのかということ、そこに関連する諸側面を明らかにすることを目的とした。対象地域としてフィリピン、カオハガン島を選定し、島民にとって身近な生き物であるニワトリ、イヌ、ホシムシを例に取り上げた。

その結果、島民はそれぞれの生き物に対して、臨機応変に対応を変えつつさまざまな関係を成り立たせていた。それは関係そのものに対する融通性と、関係を結ぶ生物の選択に対する融通性としてとらえることができた。また、人と生き物の関係は、島の社会と大きく関わっており、人間どうしのつながりをもついていることが明らかとなった。さらに、人と生き物の関係の間に技能が関連していることは、それぞれの関係が、一定の型にはめられるものでなく、人と生き物の実際のふれあいにより築くことが出来るものであることを示している。

1. はじめにー「生き物」から考える人間と環境との関わり合いー

近年の地理学においては、地理学が「関係性」を追求する学問であることの再認識、そして、古典的な課題として常に議論されてきた「人間ー自然関係」の議論が高まっている。そのなかで、Whatmore が提唱した「ハイブリッド地理学」は (Whatmore 1999)、その両者を合わせた枠組みの一つとして注目できる (野中・池口 2000)。この論文では、アクタントネットワーク理論を援用しながら、現実の社会で起こるさまざまな関係は固定されない流動的なものであること、自然と人間を入り混じった集合体として捉えることにより、自然と人間を二分しない視点の必要性を提示している。そして、これらの視点を踏まえた実証研究は、つねに変動する性質をもち時空間的な存在である野生動物と人間との関わり合いにおいて可能ではないかと述べている。

従来の動物地理学的な枠組みでは、研究焦点が動物相、歴史、生態に限られ、人間との関係性には重きが置かれなかった。近年になって、Whatmore の議論も踏まえながら、新しい動物地理学として人間と動物の社会関係性についての研究が提唱され、実証研究がみられるようになった (Philo and Wilbert eds. 2000)。しかしながら、これらの研究の多くにおいて、その対象は、人間との関係が明白な枠組みによってすでに規定されているものに限られており、その関係や利用が重複していたり、一見あいまいに見えてしまったりするものを対象とすることも必要である。

人間と関わり合いをもつ動物は、「生き物」ゆえに、常に動いており、状態が変化し、その生息環境もまた変動している。すなわち生物資源は「動き」の中に存在するものであり、利用する住民はその動きに応じてタイミング良く獲得し、住民の価値付けによりその状態に応じて

活用している。生物を生命体たらしめる「動き」の中にある特性は、人間が取り込むという資源化プロセス（知識・技能・用途）にみることができる（野中・池口 2002）。この点において、Whatmoreの述べる固定されない関係性は具体的な行為や空間的な姿にみてとることができる。このような「生き物」の存在性と「生命」の特質に注目した枠組みが、可変的な環境利用を見いだすことを可能にするであろう（野中 2002）。

人と生き物の関係は、固定されたものではなく常に流動しているものである。例えば、あるaという時点でAという関係があったとして、この関係が続くと仮定するとその先にあるbという時点でも、Aという関係は継続していることとなる。だが、bの時点までにAとの関係に何らかの要因が絡んだ場合、その時点a'でAの関係は終わり、bの時点では関係は新たにBに変化している。さらにその後b'の時点で何らかの要因が絡むと、さらにCという関係が続いて発生することになる（図1）。これは、有史以来の生き物と人間の歴史のような長期にわたる関係だけではなく、それぞれの日々刻々の日常生活の中でも同様に繰り返されるものである。つまり、関係は日々の一瞬一瞬の中でも変化しており、とどまることのない川の流れるようなものととらえることができる。そのため、ある場所における人—生き物関係を理解するにはその関係を、ある一つの関係に限らず流動性も含めて把握する必要がある。

では、そのような対象に取り組むためにはどのような方策が考えられるであろうか。たとえば、しばしば「混沌の世界」ととらえられるモンスーン・アジアでは、生物多様性に富み、かつ季節変動・年変動をともなう動態的な環境であることが特徴となる。その住民の生活様式は、さまざまな生物への近接性が相まった地域生態システムの中に構築されてきたものである。この近接性は、人間と自然とが混在することによって得られる身近な存在としての自然（距離、時間、労力）であると同時に、さまざまな利用を認め、さまざまな生きものの特質を生かす社会的文化的近接性でもある。モンスーン・アジアでは、地形・水文・気候・植生・動物・人文環境が狭い空間スケールの中でも多様な様相を呈していることが特徴的である。そのさまざまな住民、近代化、都市化、伝統、自然、人工の時空間的な混在と併存、生物間の空間と時間の分かちあいによる多元化がある。その中で関わり合いは、「これしかない」のではなく、どのような選択をするのかという可能性を含んだものとしてとらえられるであろう。また、生物の多様性は、住民の活動空間、集落、村落、地域といった異なる空間スケールにおいて異なって認識され、それぞれの独自性を生かした利用形態がみられる。それは、食事メニューにおける-

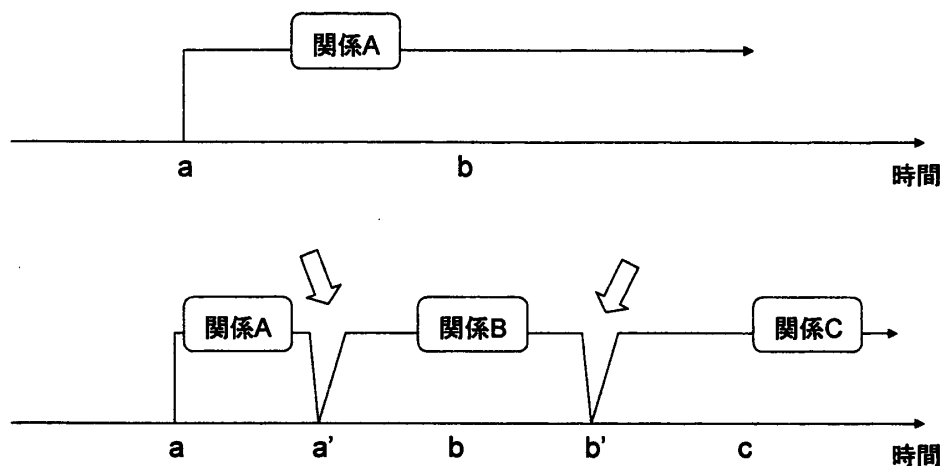


図1 関係の流動性

食材の豊富さとその味や性質を生かした調理バラエティ、鮮度へのこだわり、生物の成長段階やさまざまな部位に応じた有効活用というように具体的な形で食生活に組み込まれている。

環境利用の広がりや深まりは、経済目的のみではない生物資源利用やさまざまな環境要素を組み合わせて利用する生業複合にみられる。これらは、生計維持や経済的な重要性によってはかりうるものではなく、多様な利用が社会的・娯乐的側面をもち、生活にさまざまなバラエティをつけるという点で、生活に潤いをもたらしてきたものである。このような地域に応じた生物の多様な利用の仕方を明らかにすることによって、一元的な価値観でははかり得ない地域社会の価値観を明らかにすることができる。住民の価値観に基づく資源利用の存在を評価すること、そして、このような利用を規定する環境、文化、経済、社会的条件がどのように働くかを見いだすことは、人間と環境との関わり合いから見いだすべき課題の提示を可能にする（朴・野中 印刷中）。

以下では、筆者らが、2002年8月にフィリピンのカオハガン島で実施した動物利用に関わる住民生活の調査の結果（石川編 2003）をもとに、人間によって決められた一つの関係の枠にはまらない、さまざまな人と生き物との関係について作り出される社会・環境・価値付け・動機付けがどのような側面にみいだされるか、そしてそれを空間から理解する視点について検討を加えたい。

2. カオハガン島における「生き物」調査

カオハガン島は、フィリピンの中央部、セブ島の南東約15kmに位置するオランゴ環礁の中の島である（図2、写真1）。島の面積は約50,000m²で、2002年8月現在で92世帯が居住している（写真2）。

島の周りの海はリーフ内の干潟性域で藻場となっており、さまざまな魚類、貝類、甲殻類などが生息する。島民の多くは、この海産資源を漁業としても自給資源としても多く利用している。水に乏しい島内には畑はなく、ヤシ（食用および酒用）以外の農作物はすべて購入される。漁業以外では、島北西部の砂浜に海水浴にやってくる観光客（ほとんどが台湾人）への土産物および海産物料理販売に従事する者が多い。また、この島の所有者である日本人が経営するコテージに従事する者、およびそこが介在して商品化されているキルト製品の製作も収入源となっている。島民の月収平均は聞き取り調査によれば1665ペソである。

なお、この島は、1988年に日本人によって買い取られ、その所有者は1991年から島での生活を始め、島を訪れる観光客向けのコテージを経営し、住民の生活向上を目的としたNPO活動を行っている（崎山 1998）。

本稿に関わる調査は、まず、筆者らが共同で世帯調査（人口センサス調査、家族構成および生計活動についての悉皆訪問調査）を行い、さまざまな野生動物の利用と家畜飼育の実施状況を把握した。そして、各自のテーマに即した住民と動物との関わり合いを対象としてそれぞれ個別に訪問し、聞き取りならびに直接観察調査を行った。ここで確認された人-生き物関係は、野生動物に関しては魚介類の漁撈と食用ならびに販売、装飾品材料用貝の採取と加工販売、家畜動物に関しては、イヌ飼育と食用、ブタ飼育と食用、ニワトリ飼育と食用ならびに闘鶏であった。本稿では、干潟における野生動物の獲得を代表するものとして、海産動物のホシムシを取りあげ、また、日常的に身近な家畜動物として飼育やその他の利用にさまざまな側面を呈するイヌとニワトリを取りあげて、それらと住民との関わり合いを中心に検討する。

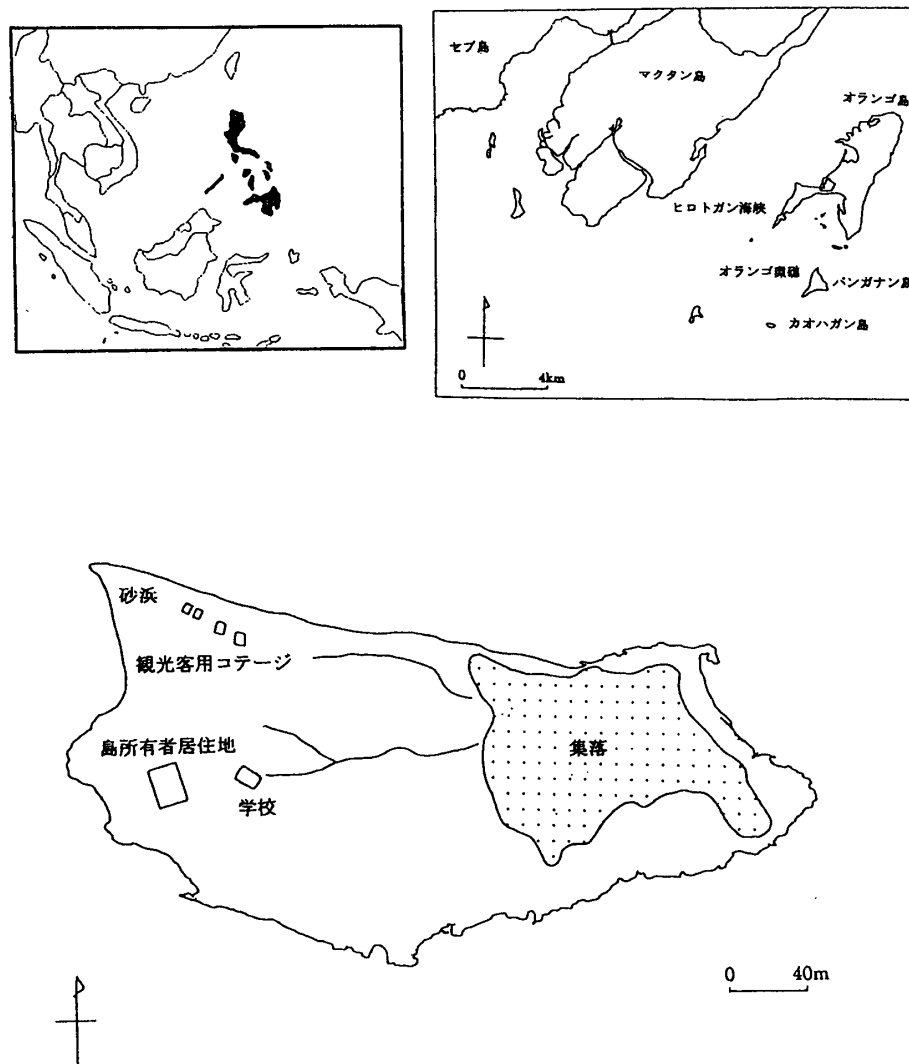


図2 調査地域

3. 関係の融通性

カオハガン島では動物は人間とさまざまな関係を持って共存してきた。こうした臨機応変な関係は第三者的立場から見ると、定まらないあいまいな関係に見えてしまう可能性が大いにある。しかしながら、これは当事者から見ると、選択性や必然性を備えた融通の利く関係であり、その時々状況などによって関係を柔軟に変化させている結果と考えることができる。

カオハガン島での人—生き物関係の融通性は、その性質から大きく二つに分けることができる。まず、一つの生き物に対しその状況に応じて関係を使い分けている、「関係自体の融通性」、そして、ある関係において生き物の種類を状況に応じて使い分けている、「関係を結ぶ種類の融通性」である。そこでこれらの関係の融通性について、前者は、イヌ、ニワトリ、後者はホシムシを例に述べていきたい。

(1) 関係自体の融通性

a. 人—イヌ関係の融通性

島内では、14軒の家で合計21匹のイヌが飼育されている。島では、イヌを食べる習慣があるが、イヌを食用としては飼っていない。所有者のいないイヌはおらず、すべて番犬として飼われている。しかしながら、飼いイヌが人を噛んだ場合、そのイヌは、食用として処分される決まりとなっている。これは、後に述べるように、島内で屠殺、調理され、島民の胃袋に収まることになる。つまり通常の状態であれば、島内での人とイヌの関係は、飼い主—番犬といったものが築かれているが、飼い犬が人に噛み付くという事態が発生した場合には、その関係は解消され、新たに、イヌを飼育動物とはみなさない捕食者と被食者の関係に変化する。ここに、常にある関係を固守するわけではなく、相手の出方によってはそれまでの関係を変化させるといふ人とイヌとの関係の融通性がうかがえる。また、この融通性が飼い主の心境の変化にも現れている例もあり、自分の飼い犬は、番犬として好きなのであって、人を噛んだら自分のイヌでも嫌いになるというような、自分のイヌが食用となることを否定しない意見や、自分のイヌでも食べるという意見が聞かれた。一方で、自分のイヌは殺されても食べる気になれないという意見も聞かれた。

b. 人—ニワトリ関係の融通性

ニワトリは、食用と闘鶏用に分けられ、食用18羽、闘鶏用25羽が飼育されている。食用と闘鶏用は同じ品種であり、オスを闘鶏用として、メスを食用として飼育している。島民は闘鶏を楽しみ、自分の飼育しているニワトリを勝たせるためにさまざまな手段を用い工夫を凝らす。また、飼育しているニワトリを闘鶏に参加したい者に貸し出すことにより、現金収入を得ている者もいる。しかしながら人と、闘鶏としてのニワトリの関係は常に完全に守られているわけではなく、闘いで死んでしまった場合のみならず、弱くて闘いに勝てないニワトリは、食用鶏へとその関係を変化させることもありうる。ここにニワトリにおける食用と闘鶏用の厳密な関係の線引きのない、融通性を見い出すことができる。食用としては、その肉、卵を売り、現金収入を得るために飼育している場合もあり、自家消費する場合もある。この点にも臨機応変にその関わりを変える融通性がうかがえる。

(2) 関係を結ぶ生物の種類別の融通性

ホシムシについては、先に示したイヌやニワトリとは異なり、同じ仲間の異なる種類を使い分けるといふ、関係そのものに対する融通性を成立させている。

ホシムシは島周辺の干潟域に生息しており、島民はこれを食用として採取している。その種類は3つに分けられており、大きさの大きい順からサルポ、バトナン、バトレと呼ばれている。いずれの種類も砂の中に潜って生活しており、干潮時になると、これらのいるところは生息穴から排出された砂により小山ができていのが見つけられる。サルポとバトナンを捕獲するためには、汎用ナイフが掘り出すための道具として用いられ、バトレは手で捕まえられる。まず、排出砂を見つけ居所の見当をつけると、そこにすばやくナイフを差し込み（バトレは手のみで）、ホシムシが地中深く潜ってしまわないうちに体をつかんで取り出す（写真3）。これらを捕獲することができるのは、干潮時で水深が浅くなったときである。干上がってしまうと深く潜ってしまい、手が届かなくなり、また、水深が深すぎても、取り出すことはできないので、獲得に適した時間帯は限られる。島民は、砂山の形状でこれら3種のいずれがそこにいるかを判断し、砂山の大きさと向きから地中での居所を推測して捕獲する。しかし、この一連の作業は敏

捷性を要し、必ずしも誰もが簡単に捕獲できるわけではない。

調理は、水洗いして汚れを除いた後、口から棒を差し込んで裏返すことによって内臓と砂を取り除く。そして、タマネギ、トマト、ネギ、ショウガなどの野菜と酢で和える（写真4）。味は、サルポが3種の中で一番美味であるとされている。バトナンも味の上ではよいとされているが、皮が硬いため、皮をナイフで剥き取り除く過程を要する。そのため、バトナンはサルポより調理に手間がかかる。そこで島民は、捕獲のしやすさと、調理のしやすさ、味の点から3者のどれを取ろうか画策する。そこに、個人がどの種類との関係を選択するかという、関係を結ぶ種類の融通性を見出すことができる。

4. 人—生き物関係から生じる社会との関わり

前章で、人と生き物は、双方の出方に応じた臨機応変な関係を築いていることが明らかとなった。そうした関係は必然性や選択性をもつものであったが、イヌ、ニワトリのような家畜の場合には、その必然性や選択性は、社会との関わりに大きく関連しており、それにより、人と生き物の融通の利く関係がさまざまな方向に展開され、規定されていると考えることができる。

(1) 規範と楽しみ

島内では、イヌは自らの意志で自由に動き回っており、イヌの飼い主でない他人の敷地にも自由に出入りできる（写真5）。調査時には、庭先の縁台で手仕事をする女性の足元に近所のイヌが寝そべっている、または縁台に座る子供たちの中に近所のイヌも一緒に座っているところがしばしば観察された。このように、普段のイヌの行動に注目すると、イヌは島民の生活に溶け込み、自由が制限されることはないように見えるが、カオハガンでは前述したように人に噛み付いたイヌを飼い続けることができないルールがある。それは、もし島内で飼い犬が人を噛んだ場合、飼い主は飼い犬を島内の誰かに譲りそこで殺してもらうか、近隣の島であるカプラン島に売るかして、手放さなければならないというもので、島内で処分する場合、殺したイヌは島民に食べられることとなる。また飼い主は、噛まれた者に対して狂犬病予防接種代を支払わなければならない。カオハガン島には病院がないため、予防注射のために近隣の島の病院に行かねばならず、その注射代が非常に高価なため、飼い主は金銭的に大きな負担を負うことになる。また、島民は狂犬病を非常に恐れており、噛まれた人は、予防注射を打たないと安心できないという。そのため、イヌが人を噛むことは、そのイヌに関係している双方の人間にとっては、恐怖ともいえるべき大問題である。

人を噛んだイヌを島内の誰かに譲る場合、飼い主は、イヌを誕生日など祝事のある家に譲り渡す。イヌの調理はもらった家の前の屋外で行われる。筆者らが調査を行った際には、近所からは人々が集まり、ラムコーク（コーラとラム酒のカクテル）を飲みながら終始笑い声の絶えない陽気な雰囲気の中、調理が行われた（写真6）。島民の話によると、イヌの肉は調理法によっては美味しくもまずくもなるため、味は調理人の腕にかかっている。腕の良い料理人が調理したものは大変美味で、その時には多くの近所の者たちが食べに来るといふ。このことから、イヌはブタやニワトリより気軽に近所の人が相伴にあずかることのできるハレの日の食事であると考えられる。

このように、人とイヌの関係は、人対イヌ個々の関係のみに帰結してしまうだけではなく、

それによって、島の秩序を守る社会的なルールが存在すると同時に、そのルールのために人が集まり、楽しい宴会の場が繰り広げられるという、規範と楽しみ両面からの社会との関わりが生じていると考えられる。ただし、かつてはイヌを好んで食べていた者の中に、狂犬病に感染したイヌを食べると食べた人間にも狂犬病がうつると考えるようになった者もあり、感染の心配からイヌ食を嫌いになった、もしくは好きだが感染を心配して食べられないという意見も聞かれた。

(2) ニワトリを介した人の関係

人と生き物の関係から生じる社会的な関わりは、人とニワトリの関係からもみることができると。

島内のニワトリは、闘鶏用のものは敷地内や公共の空間でつないで（写真7）、食用のものは放し飼いで、もしくは自宅敷地内の籠に入れて飼育されており、島民にとって非常に身近な存在である。闘鶏用ニワトリの世話は男性の仕事であるが、闘鶏の試合は男女共々楽しんでおり、カオハガン島および近隣の島で年に数回実施される祭り（フェスタ）の際に本試合が行なわれる。強い闘鶏用ニワトリの系統はアメリカン・チキンのオスとピサヤ（在来種）のメスの間に生まれたラサという種類であるとされているが、実際には島内ではラサ種は飼われていない。飼い主が自分のニワトリに対して飼育上においてさまざまな働きかけをし、そのつながりを深めることにより、強いニワトリに仕上げている。この働きかけという部分に関しては後で詳しく述べることにする。

島では仲間がニワトリを持ち寄り、いたるところでしばしば練習試合が行われている（写真8）が、フェスタで行われる試合だけでなく、この練習試合も島内の人々の社会的つながりを深めていると思われる。練習試合をするため、対戦する2名がニワトリを持って現れると、周りにおのずと人が集まり円を描くようにして練習試合の成り行きを見守る。これによってそれぞれの飼い主がニワトリを通して関わり合いになるだけでなく、それを見物する人々もそのニワトリを介して飼い主や周りの人々と関わり合う。そして、ただ見物しているだけでなく、場合によっては、この練習試合で強いニワトリのめぼしをつけておき、次回自分が試合を行なう際に借りに行くこともある。そこで新たに人とニワトリの個別の関係が生じるだけでなく、貸す人間と借りる人間の間にもつながりが生じる。このように、一対のニワトリの戦う背後には多くの人間どうしの関係が生じているのである。

5. 生き物とつながるための技能

前章では、人と生き物の関わりを島の社会と関連付けて明らかにしたが、その関係は当然ながら社会全体のみならず個別にも形成されている。人間と生き物の関係の個別側面は、それぞれの生き物と人間の状況に応じた駆け引き、つまりは技能により示される。

この技能とは、機械的な操作で一定の結果が得られる技術に対して、人間の手加減で如何様にも結果が変わる職人技に代表されるようなものである。この場合では、人と生き物の間になされるさまざまな個々の画策であり、人と生き物の関係性を見るためには、この画策を抜きにしては考えられない。そこで、人-生き物間に個別に形成される関係としての技能を、ホシムシ、ニワトリを例に示す。

(1) ホシムシ獲得のための技能

前述したように、ホシムシは道具さえあれば誰でも採れるというものではない。まず、海底の砂にあいた穴の形状からホシムシの有無や大きさをいかにすばやく推測できるかという技を要する。これは、まさに長年の経験に基づいた状況判断であり、素人がその技を習得するのは容易なことではない。そして、めぼしをつけた穴にナイフを突っ込み、手で捕獲することになるが、ここでも技能が必要となってくる。ホシムシは危険を察知すると穴の奥へと逃げようとするため、人間はすばやくその方向に手を入れ動きを止めねばならない。この動きは大きさの一番大きいサルボが最も速く、熟練者であっても逃げられることもしばしばある。つまり、気軽に採れる環境にあり、道具もけっして特別なものを必要としないにもかかわらず、捕獲は容易でないのである。反対に一番小さい種類のバトルは比較的容易に捕獲できる。したがって、捕獲者側の個々の技能に程度の差があり、ホシムシ側にもすばしっこさの点で違いがある。このことが捕獲者とホシムシ間の相互の駆け引きを生むのである。そして、少しの工夫と手加減としての技能が、人とホシムシとの関係を形成しているのである。

(2) 闘鶏用ニワトリ飼育に見られる技能

この工夫、手加減としての技能は、ホシムシを捕獲するためのほか、闘鶏でニワトリを勝たせるための方法にも現れている。島民は強いニワトリに育て上げるためにさまざまなことを行っているが、これはどの飼育者も画一的に同じ方法を適用するのではなく、それぞれで工夫しながら育てている。たとえば、闘鶏用に育てるヒナを購入する際、なるべく強いものを選ぶとし、その基準として、エサを与えてみて強くつくものを選ぶという意見が聞かれた。また、飼い主は、自分の飼育しているニワトリを強くするために食用のニワトリには与えないスラッサーやスクランブルと呼ばれる複数の穀物からなる配合飼料を与えている。それ以外のエサについても飼い主の懐具合や闘鶏への情熱などによってそれぞれが工夫をしている。例えば、ある男性によると闘鶏用のニワトリにはコーンやその他穀物を混ぜたもの、卵の黄身、ニンジン、バナナなどの特別なエサを与え、本試合の10日前には、タブレット状のビタミンを食べさせるという。つまり、闘鶏における人とニワトリとのつながりは、闘鶏の試合で闘わせて楽しむ時のみに生じるのではなく、飼育者が試行錯誤しながら強いニワトリを育てていく過程においても、非常に密接なつながりが生じているのである。そこで、両者の関係性を見る上で技能とは、つながりを決める要因となり、かつ、そのつながりにオリジナリティを加えるものであると認識できよう。また、このような技能は、飼育者が自分の闘鶏用ニワトリを他者に貸し出す際、強いニワトリほど高値で貸し出されるため、ニワトリを貸し出すことによって得られる収入にも影響してくるであろう。

6. 食べ物としての関わりとその魅力

以上、人と生き物について、その関係を社会的、個人的なつながりの観点から述べてきた。それぞれの関係はさまざまであるものの、前述したようにこれら3種の動物は、共通して食用として利用される関係も持ち合わせている。そうした理由から、これらの食用としての関係は、カオハガン島での人-生き物関係を明らかにする上で重要であると考えられる。そこで、本章では、それぞれの生き物が食べ物に変換された後の関係を、食べ物として利用することに対す

る魅力という点に着目して明らかにしたい。

ニワトリについては、その肉に対して、味が良い、売って現金収入を得ることも自分で食べることも出来るなどの意見が挙げられ、島民は食べ物としてのニワトリに非常に価値を置いていた。ブタについても同様の価値が認められたが、食用としてのニワトリは、ブタと違って屠殺や調理が簡単で誰にでもできるため、好きな時に好きなだけ食べられるという理由からブタ以上に重要な動物として認識していた。

イヌについても、ニワトリ同様、味が良いという意見が挙げられたが、前述の狂犬病感染を心配して食べなくなったという理由や、イヌの肉自体が好きでないという理由から、イヌを食べないという人々も存在する。また、島のイヌは、食用として飼育されているのではなく人を噛んだときのみ食べられることは前に述べたが、調査対象者の中の一人の女性の話によると、人を噛む事件は年3~4件ほどあり、その時に祝事の食事としてイヌが食されるという。したがって、島内のイヌは、頻繁には食べられるものではないと考えられる。ある女性（49歳）の話によると、彼女は、イヌを美味しいと感じるが、実際にイヌを食べたのはこれまでに2回しかないという。ただしこれは、イヌが調理された家が、自分の身近にどれだけあったかということも影響しており、これまでに数え切れないほど食べているという男性（44歳）もいた。島でイヌが人を噛む事件が起こらず、イヌが食べられない場合、近隣の島から食用として売られているイヌを買ってくることも出来るというが、今回の聞き取り調査では、実際に島外から買って来て食べたことがあるという話は聞けなかった。島で売買されており、買ってでも食べるニワトリと比べて、イヌは美味しいと感じている反面、必ずしも食べなければならないというものでもないと感じていることがうかがわれる。これはホシムシについても同様であり、サルポは3種のホシムシの中で、獲るために技能をもっとも要するが、そのために島民がその技能を身につけようと努力しているわけではなく、実際捕獲する人は全島民のうち12人と限られている。このことは、島民が3種のホシムシの中でサルポが一番美味で、調理も難しくないということは認識しているものの、それに対する執着がないことを示している。

このように、食用としてのニワトリ、イヌ、サルポを見た場合、3者ともに、味の点では、美味であると認識しているにもかかわらず、ニワトリと、イヌ、サルポの間には価値の置き方の上でその重要度に差があった。これは、その生き物が食用として、どれほど現金価値があるかということにも現れていた。ニワトリは飼育していれば、相当の値段で売ることが出来る。しかし、イヌは島内で食用としての飼育は行われていないため、食用としての現金での売買はなされていない。そしてたとえ食用以外の用途で売ることが出来たとしても、もしそれまでに飼い犬が誰かを噛んでしまったとき、噛んでしまった相手に支払わなければならない病院代の負担は、イヌを売って得られる代金よりはるかに大きい。そして、サルポは、捕獲することこそ技がいるが、自家消費が主であり、販売を主目的とした捕獲活動は行われていない。したがって、経済的な目的が技術や技能をより発達させているのではない。

7. おわりに - 「生き物」から紡ぎ出される地域社会 -

カオハガン島での人と生き物の関係を明らかにするため、島民にとって身近な生き物であるニワトリ、イヌ、ホシムシを例に取り上げ、その関係について検討した結果、それは、臨機応変に変化しつつ成り立っていることが明らかとなった。そしてそうした関係は融通性としてと

らえることができ、関係自体と関係を結ぶ生物の選択という両側面において見られた。その中で、人と生き物の関係は、島の社会と大きく関わっており、人間どうしのつながりをも作っている。また、人と生き物の関係の間に、技能が関連していることは、それぞれの関係が一定の型にはめられるものでなく、人と生き物の実際のふれあいにより築くことが出来るものであることを示している。

このような事例を積み重ねていくことにより、「生き物」をキーとした人間－環境の関係性を環境の多様性と多元性モデルとして構築し、環境と文化をともに存立させるパラダイムを提唱し、住民の価値観にたった資源評価システムの構築と環境保全の方策を打ち立てるとともに、地域固有の文化生態を軸とした発展の方向性を探ることができるであろう。

以上の問題意識は現代社会においてどのように適用することが可能であろうか。たとえば、現在の日本においては、人間は生き物とかわかるとき、その関係を固定したものとして捉え、それ以外の関係に対して目を向けることは少ない傾向にある。そのため、人間側が固定したものとして取り決めた関係が崩れたとき、つまり人間がそれぞれの生き物に課した役割分担を生き物側が何らかの形で放棄したとき、人間はそれを生き物によって引き起こされた「問題」として捉えることになるのである。このことに関しては別稿を期したい。このような「問題」は、近年日本で増えてきているといわれているが、本稿で述べたように関係は流動するもので、その中で関係が、臨機応変に変化すること、つまり関係の融通性が生じることは全く不自然なことではない。このことを踏まえた上で、人と生き物の関係を考えることは、その変化を、単に生き物側がおこした「問題」として扱うのではなく、そこから、より良い関係を考えていくことの足がかりとなるであろう。

参考文献

- 石川菜央編「フィリピン、カオハガン島の生き物文化誌」名古屋大学環境学研究所、2003。
- 崎山克彦『何もなくて豊かな島－南海の小島カオハガンに暮らす－』新潮社、1998。
- 野中健一「東南アジア・アフリカ・日本の食材から考える“生命の文化化”と“生命のネットワーク”」
- 石田正昭編『総合科目・食と農』三重大学出版会、2002、89－99頁。
- 野中健一・池口明子「“地域”研究から“人間”研究へ向けて－“ハイブリッド地理学”から考える三重の可能性－」『TRIO（三重大学大学院人文社会科学研究科）』1、2000、12－17頁。
- 野中健一・池口明子「“生きもの”からみるモンスーン・アジアの人間－環境関係－ベトナムのフィールドワークからの地理学的展望－」『人文論叢（三重大学人文学部）』19、2002、191－216頁。
- 朴恵淑・野中健一『環境地理学の提唱』昭和堂（印刷中）。
- Philo, C. and Wilbert, C.(eds.), *Animal Spaces, Beastly Places-New Geographies of Human-animal Relations*. Routledge, 2000.
- Whatmore, S. *Hybrid Geographies: Rethinking the Human in Human Geography*. In D. Massey, J. Allen and P Sarre (eds.), *Human Geography Today*. Polity Press, 1999, 22-39.



写真1 調査地域全景



写真2 集落の様子



写真3 ホシムシの捕獲

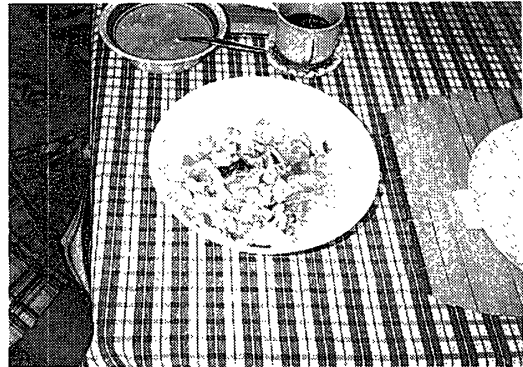


写真4 ホシムシを使った料理

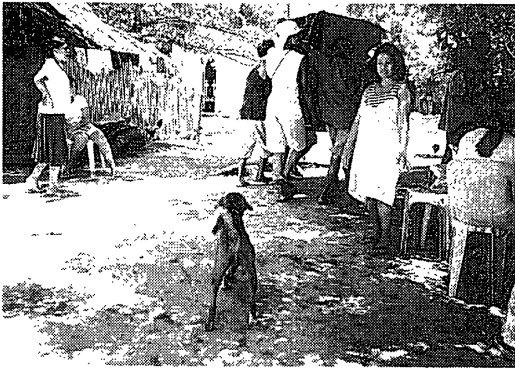


写真5 島内を自由に動き回るイヌ



写真6 イヌの解体・調理



写真7 闘鶏用ニワトリの飼育



写真8 闘鶏練習試合